

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

3月は、卒業や職場を定年退職するなど別れの季節でもある。西日本新聞のコラム春秋が日本一短い手紙コンクール「第26回一筆啓

上賞」の大賞受賞作を紹介した。今回のテーマ「先生」に約3万9000通の応募の中から「てんきんてわるものが、せんせいをつれていった。やっつけるから、もどってきて」。4歳の男の子が転動でいなくなった幼稚園の「みさきせんせい」への想いで綴った作品だ。10日毎に届く全国の新聞からスクラップしたコラム。大北地域の皆さんに伝えたい内容を今後も順次紹介して行きたい。

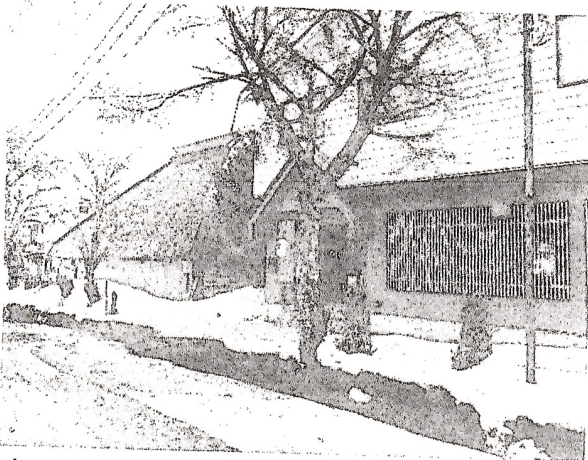
つけた新芽のふくらみや、足元の枯れ草から顔をのぞかせる博緑の芽を紹介。寒い間に春の準備を整えておくのは人間も変わらない。春の使者に誘われて、人々の装いも次第に軽く、明るくなって行く。

ども。若いうちは我慢強く勉強する。荷物を背にして歩くラクダのよう。次にライオンになる。これは批判精神を指す。学んだ事は本心に正しいのか疑ってみる。そして最終段階。自分で何か新

また北國新聞のコラム時鐘では、ただの石に魅力を感じるのには「旅ごころ」だ。普段は目にもとめない小石が光って見える。誰が見てもつまらない石ころなのに磨けば光る事に気づく。自分を発見

地域のリーダーは、多くの情報を得る事の積み重ねが大切だ

あっても、自分の中に隠れていた原石を見つける。歳月もまた、可能性を秘めた原石だ。光るか光らないかは磨く者の努力したい。近年、白馬エリアの魅力に磨きをかけているのは、地域外からの人材



白馬村新田地区の古民家リゾートを生かす周辺の原石は何かを考える事が求められている

だ。地域にある原石の素材は数限りなくあるはずだ。外部の知恵者に全てを委ねるのではなく、地域住民自身が知恵を出しながら共に魅力ある国際リゾート

地を築き上げる事で、継続できるエリアが造れると信じている。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)